

令和7年度 学校自己評価システムシート(県立杉戸高等学校)

目指す学校像	一人ひとりの能力を確実に伸ばし、夢の実現を支援する学校
--------	-----------------------------

重点目標	1 進取の気概を持ち、社会に貢献できる人材を育成する 2 総合的な知の習得を行う 3 地域との交流を深めた教育活動を行う
------	--

達成度	A	ほぼ達成(8割以上)
	B	概ね達成(6割以上)
	C	変化の兆し(4割以上)
	D	不十分(4割未満)

※ 学校関係者評価実施日とは、最終回の学校評価懇話会を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。

出席者	学校関係者	6名
	事務局(教職員)	9名
	生徒	3名

※ 重点目標は3つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目(年度達成目標を意味する。)は複数設定可。
 ※ 番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

学校自己評価							学校関係者評価	
年度目標					年度評価(令和8年1月27日現在)		実施日(令和8年2月3日)	
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校関係者からの意見・要望・評価等
1	令和3年度に入試の倍率が定員割れを起こして以来、広報活動に力を入れている。その結果、令和6年度入試は1.19倍、令和7年度は1.33倍となり、入学時の学力は上がっている。一方で杉戸高校は生徒をどこまで引き上げていくかという学校全体としての意識が共有され切っているとは言えない。教員個々の授業改善に加え、組織としての取組を強化していくことが不可欠である。	①授業改善に向けた取組 ②生徒を「自立した学習者」にする取組	①3年間を見通した教科・科目の方針に則って授業計画を作成し、教科内で目線を合わせた授業を実践する。 ①校内の授業見学、他校視察や予備校の主催する教員研修、教育センターの開催する希望研修を活用して、教員個人の能力の伸長を図る。 ②進路指導部と学年が協力して、生徒が自ら学習に向かえる姿勢が作れる仕掛けを作っていく。 ②生徒が自習をしたり、教員に質問しやすくなる環境を整備する。	①教科内で目線を合わせた授業を実践することができたか。 ①教員一人一人が個別に研修する機会が増えたか。 ②進路指導部が3年間を見通して時期に応じた目標を定め、スタサポや模試の結果を分析し、その結果を学年に伝えることで、各担任が個に応じた指導ができたか。 ②生徒が主体的に杉高手帳を活用する機会が増えたか。自習室の整備ができたか。生徒が教員に質問をする回数が増えたか。	①教科によってどこまで目線合わせができたかは異なるが、職員研修や学校生活アンケートの振り返りなどで教科内ですり合わせをする機会を設け、どこに重点を置くかなどはコンセンサスを得ることができた。 ①進路指導部のプロジェクトチームを中心に他校視察を行い、全体として研修機会は増えている。 ②進路指導部で3年生個人データをチェックし、学年に結果を伝えることができた。 ②勉強マラソンで質問部屋を設けたり、使っていない実験室を自習室として開放したりするなど生徒が主体的に学習できる機会が増え	A	進路指導部では、前年度の反省を踏まえ、進路指導部が中心となって学年の進路指導を主導する体制への転換を図った。具体的には、3年生の個人データの精査や、進路活動の意義を学年間で共有するなど、組織的な働きかけを実施することができた。また、プロジェクトチームによる他校視察を通して、3年間を見通した進路計画の具体化が進み、計画全体の見直しも着実に図られている。 今後は、現在在籍している生徒の集団特性を踏まえ、授業改善と進路指導の両面から一層の改善を進めていきたい。特に、近年の入学生には、コツコツと努力を積み上げることが苦手な傾向が見られる。杉高手帳の活用を通して、逆算して計画的に取り組む重要性を身につけさせることができれば、進路実現に向けた主体的な行動が促されると考える。	進路希望調査結果では、今年度も引き続き高倍率で、地域や外部の方に評価いただいた結果と思われる。先進校視察は引き続き、続けていってほしい。令和9年度から公立高校の入試が変わること、私学が無償化されることから、さらに公立高校から私立を志望される生徒が増える可能性がある。杉戸高校の地域の評価が高まっている今、更なる工夫を検討してほしい。他校への視察は、表からは見えないものを意見交換させてもらうととてもいい機会だと考える。時間がない中ではあるが、引き続き実施をお願いする。
2	新型コロナウイルスの猛威がなりを潜め日常が戻ってきた今、これまで規制をかけていた、対面での活動や学校行事を元に戻していく必要がある。人とのかかわりを重視し、体験する機会や異なる立場からの人から学ぶ機会を充実させることで、座学だけでなく生きていく上で必要となる総合的な知の習得を図っていく。	①これまで行なってきた教育実践の結び付け ②学校行事の充実	①授業で行なっていることと行事として行なっていることを結び付け、生徒の意識の中で関連付けをさせる。 ①進路指導で活用している模試、スタサポ、進路講演などを結び付け、進路目標の達成を目指す。 ②LHR計画の中に、租税教室や金融教育、防災教育など今後生徒が生きていくうえで必要となるリテラシーを養う。 ②DXハイスクール事業を活用し、教科横断的な授業の実践、探究活動における具体的な実践を推進する。	①授業と、Start Up Programや英検全員受験などの行事とを結び付け、有機的に機能させることができたか。 ①これまでやってきた模試、スタサポ、進路講演の系統性を高め、進路目標を達成することができたか。 ②LHR計画の中に租税教室や金融教育、防災教育などを位置付け、実施することができたか。 ②教科横断的な授業の実践や、探究活動における具体的な実践を行なうことができたか。	①②租税教室や金融教育を公共の授業進度に合わせてたり、防災教室を地理総合の授業進度に合わせてたりなど授業との結びつきを意識した実施を行なった。 ①進路指導ではこれまでのものを変えるのではなく、この時期に模試をやる意義、この時期に進路を考える意義など今日やることの意味付けをすることでモチベーションの強化を図った。 ②DXハイスクール事業の一環として地理の時間や体育の時間にデータサイエンスを絡めた実践を行い、情報Ⅱの授業の中で実践的なデータ活用を行なった。	A	総合的な知の習得をめざし、LHR計画の中に租税教室、金融教育、防災教育などを取り入れ、一部については授業との連携により効果的な時期での実施が可能となった。しかしその一方で、単独の講演会形式にとどまり、生徒の学びとして十分に定着しなかった取組も見受けられた。次年度に向けては、学習支援部を中心に、3年間を見通したキャリア教育の体系化について検討を進める必要がある。 また、DXハイスクール事業の授業を中心に、データサイエンスを活用した教科横断的な学習を実践したものの、依然として単発的な取組にとどまっている。今年度以上に総合的な探究の時間にもデータ活用の視点を意識的に取り入れ、データから妥当な結論を導くなど、根拠に基づいた探究的学習をより一層深化させることが課題である。	探究で行ったかき氷販売に絡んで、地域に住んでいた子供たちが就職などで、地域に戻らない。地元のクラブチームで長らく活動をしているが、地元の活動に参加する人が減っている。どこか杉戸高校や地域住民を巻き込んで、今回のかき氷販売のように、地元でも、コミュニケーションがとれるような取組をしていきたい。 3年間安心して、学校に通わせることはできたと思う。小学校に通う子供がいるがICTの活用については、高校よりも小学校の方が進んでいるように思われる。引き続き活用を進めてもらいたい。
3	本校のように地元からくる生徒も多い学校では、地元可愛され、良好な関係を保つことが重要である。幸いにして、地元地域からは生徒のマナー、行動について一定の信頼と評価を得ているものの、しばしば地元住民から意見をいただくこともある。生徒のモラル、マナーを向上させ、地元地域に還元できるよう取組を行う必要がある。	①生徒を「自律する生活者」にする取組 ②地域連携の強化	①登下校時の交通マナーや生活空間の整理整頓、挨拶や身だしなみなどについて、自らの行動を客観視させ、生徒個人の自律を促す。 ①地域、保護者からの助言、指摘から情報を得て、生徒の実態に即した個に応じた指導を行う。 ②杉戸町役場や大学、小中学校と連携し、「総合的な探究の時間」や特別活動として具体的実践を行い、交流を深める。 ②地域貢献事業として、本校を希望しない生徒にも広く入試情報の提供を行なう。	①教室や部室が整っているか。整容再検査者数が減ったか。 ①保護者アンケートやいじめアンケートなどから問題を未然に防ぐことができたか。 ②杉戸町役場や大学、小中学校と交流を深めることができたか。 ②近隣の中学生に対し、広く入試情報を提供できたか。	①定期的に部室の点検を行い、日常的に整理整頓をする習慣がついてきた。 ①学校生活アンケートや保護者アンケートを分析し、学年や分掌で振り返りを行なうことで、現状の問題点を検討することができた。 ②大学の出前授業の活用、小学校での歯磨き指導など、近隣の学校と交流を深めることができた。また、杉戸町役場と連携し、探究の一環として、かき氷の店出をしたり、杉戸マップの作成をしたりと実践的な活動を行なった。 ②地域貢献事業として学校説明会にあわせて、学習塾経営者を講師とした入試情報提供を行なった。	A	生徒自身が自らの行為を客観的に捉える力については、着実に自律した生徒が育ちつつあることを感じている。今後も学校・地域・保護者との関係を良好に維持しながら、生徒が自らを律する姿勢を身につけられるよう、学校として組織的に指導が行える環境をさらに整備していきたい。 総合的な探究の時間においては、これまでの政策提言に加え、「自分たちに何ができるか」という視点から具体的な実践に取り組んだ。その結果、能動的に探究活動に臨む生徒が増加し、発表内容の質が向上するとともに、質問力も高まるなど、生徒の成長が顕著に見られた。具体的な実践が地域への還元にもつながっている点は大きな成果である。来年度はこの取組をさらに加速させ、具体的な実践件数の増加を図りたい。	生徒の通学時のマナーはだいぶ良くなったが、年度が変わって4月になると1年生を中心に、よろしくない光景を見かける。1年生に特に注意して年度当初指導をお願いする。 大学・進路情報は、どれが自分に合っているか絞ることが難しい。選択をする生徒・保護者が少しでも選択肢を絞れるように情報提供をお願いしたい。